

## 「普通の日常」のために

関礼子, 廣本由香編「鳥栖のつむぎ もうひとつの震災ユートピア」新泉者、2015

権正直樹

「普通の日常」とはなんだろうか。震災で多くの命が失われ、津波の映像、がれきの写真は多くの人が見たことがあるだろう。しかし失われたものは目に見えるものだけではない。「子どもたちが外で最高にいい笑顔で走り回る姿。大好きな石ころだって捨てる。砂場に寝転がっている。全身が公園で遊べる喜びにあふれている。」子どもの笑顔、離れて暮らすことになったために会えなくなる家族。生まれ育った故郷を離れる寂しさ。目には見えないけれど、多くの「普通の日常」が奪われた。本書は原発によって失われた「普通の日常」を求めて福島から鳥栖に避難した家族の6つの物語である。住んでいた場所や原発の影響もまったく異なるそれぞれの家族の、震災を乗り越えようとする家族に対する思いやりと避難生活の葛藤がストレートに綴られている。

避難の理由として共通していたのは、「子どもを安全な場所で育てたい」ということだ。放射能の影響から身を守るため、家から外に出ることができなかった子どもが鳥栖の自然の中で楽しそうに遊ぶ姿が実に生き生きと描かれていたことが印象的である。全力で走っている子どもを見て幸せを感じている親の姿からは安心感や安堵感が溢れているのが伝わってくる。地方出身の私も外で遊びながら育ってきた。それこそ私にとっての「普通の日常」であった。もし、自分が親になった時に子どもに外で遊ばせることができないとしたら相当な罪悪感とやりきれなさを感じるだろう。しかし、避難すれば外で遊ばせることはできるが、自分の生まれ育った故郷で子どもを育てることはできない。本書の中で葛藤と戦う親の姿に、子どものために故郷を離れるべきなのか深く考えさせられた。

子どもの為に避難をするにあたって、福島で仕事をする為に残る父親と離れ離れになってしまう物語がある。外でおもいきり遊べるけど父親には会えない。父親も家族に会えず、一人残された中で厳しい生活を送る。これが「普通の日常」なのかという葛藤の中で、今できるベストの選択だと前向きに生活する家族の姿がそこにはある。

そして鳥栖に非難した一人の母親の「ピンクバード・セカンドホーム」という鳥栖の生活情報を公開する活動によって人とのつながり、人に会うことの安心感を私は再認識した。活動は幼稚園の情報の提供、避難者の質問に答える、おもちゃ・生活雑貨の提供であるが、それに加え、コミュニケーションをとること、心細さを解消するという「心のケア」という観点でとても大きな役割を果たしている。被災者への物的支援ばかりが取上げられている。しかしこれからの復興で必要なのは心のケアであり、人とつながる機会の提供だと思う。震災を通しての出会い、家族の愛、人とのつながりのエピソードをもとに「普通の日常」について考えさせられる。

震災は時間が経つにつれて忘れられていく。震災前後になれば多くのメディアが震災の

特番を取り上げ、その日だけ震災を思い出す。それでいいわけがない。メディアがあおらなければ震災について考える機会がないこの現状を変える必要がある。メディア待ちの受動的な考えを変え、能動的に震災について考えなければいけない。震災に限らず、公害や地域社会における問題は様々なところで起きている。ひとりひとりが当事者なのである。それぞれの地域での教訓を別の場所で震災や公害が起きたときに活かすことが重要だ。震災や公害は他人事ではないのである。